COINCIDENCE DEGREE について

東京理科大学大学院数学専攻 小林 二太

X,Z を Banach 空間, $L:D(L)\subset X\to Z$ を index 0 の線型 Fredholm 作用素, $N:X\to Z$ を必ずしも線型で ない写像とする. このとき次のような方程式を考える:

$$(1) Lx = Nx.$$

- J. Mawhin は N が L-compact という条件を満たしているときに、上の方程式の解の存在に関わる (L,N) の coincidence degree という整数量を 1972 年に導入した. $X=Z,\,N=I$ のときは coincidence degree は L-N の Leray-Schauder 写像度と一致する. (1) の例として次のような自励系 Floquet 境界値問題を取り上げる (C は \mathbb{R}^n から \mathbb{R}^n への線型写像).

(2)
$$x' = f(x), \quad Cx(0) = C(T),$$

ただし、 $f \colon \mathbb{R}^n \to \mathbb{R}^n$ は連続. 文献 [1] では C = I のとき、 $C^\# = \{x \in C([0,T],\mathbb{R}^n) \mid x(0) = x(T)\}$ とおき、 $D(L)=C^\#\cap C^1([0,T],\mathbb{R}^n), L:D(L)\subset C^\# o C([0,T],\mathbb{R}^n)$ を $x\mapsto x'$ と定め, $N:C^\# o C^\#$ を $x\mapsto f(x(\cdot))$ と 定めている.このとき,問題 (2) は $C^\#$ 内の抽象問題 Lx=Nx と表される.文献 [1] ではこのときの coincidencedegree の具体的な表現が与えられているが, $C \neq I$ の場合は何も与えられていない. そこで本研究では, 一般の C に対しても coincidence degree の具体的な表現を次のようにして与えた.

 $D(\widetilde{L}) = C^1([0,T],\mathbb{R}^n), \ \widetilde{L}: D(\widetilde{L}) \subset C([0,T],\mathbb{R}^n) \to C([0,T],\mathbb{R}^n) \oplus \mathbb{R}^n$ を $x \mapsto (x',x(T)-Cx(0))$ と定め、 $\widetilde{N}\colon C([0,T],\mathbb{R}^n) o C([0,T],\mathbb{R}^n)\oplus \mathbb{R}^n$ を $x\mapsto (f(x(\cdot)),0)$ と定める.このとき,問題 (2) は $C([0,T],\mathbb{R}^n)$ 内の 抽象問題 $\widetilde{L}x = \widetilde{N}x$ と表される. この一般の場合に $(\widetilde{L},\widetilde{N})$ の coincidence degree の表現が得られた. ただし, $\mathbb{R}^n = \mathrm{Ker}(I-C) \oplus \mathcal{R}(I-C)$ のときのみ, $d_L(\widetilde{L}-\widetilde{N},\widetilde{\Omega})$ は次のように表現される:

$$d_L(\widetilde{L} - \widetilde{N}, \widetilde{\Omega}) = d_{LS}(I - M, \widetilde{\Omega}, 0).$$

$$d_L(L-N,\Omega) = d_{LS}(I-M,\Omega,0).$$
ただし $\widetilde{\Omega} \subset C([0,T],\mathbb{R}^n)$ は $\widetilde{L}x = \widetilde{N}x$ が $\partial\widetilde{\Omega}$ 上に解を持たないような有界開集合、 d_{LS} は Leray-Schauder 写像度、 P は $\mathbb{R}^n = \operatorname{Ker}(I-C) \oplus \mathcal{R}(I-C)$ の分解に関する射影 $P \colon \mathbb{R}^n \to \operatorname{Ker}(I-C).$ そして、
$$(Mx)(t) = \int_0^t (f \circ x)(s) ds + P(\overline{x}) - P(\int_0^T (f \circ x)(s) ds) - P(\frac{1}{T} \int_0^T (T-s)(f \circ x)(s) ds) - ((I-C)|_{\mathcal{R}(I-C)})^{-1}(I-P) \int_0^T (f \circ x)(s) ds.$$

特にC = I のとき、この coincidence degree は、ある条件下では、 $C^{\#}$ で考えられた文献 [1] の coincidence degree と一致することが確かめられた.

定理 $\mathbf{1}$ $n \geq 2$ で, $\Omega = \{x \in C([0,T],\mathbb{R}^n) \mid \|x\| < R\}$ (R: + 分大) とする. さらに, $\lim_{\|x\| \to \infty} f(x) \neq 0$ が存在す れば、 $\Omega = \widetilde{\Omega} \cap C^{\#}$ に対して次が成立する:

$$d_L(\widetilde{L} - \widetilde{N}, \widetilde{\Omega}) = d_L(L - N, \Omega).$$

さらに C = I のときは J. Mawhin は (2) の S^1 -同変性に着目して, 次の定理を与えた.

定理 2 ([2]) (2) が $\partial\Omega$ 上に解を持たないような有界開集合 $\Omega\subset C^\#$ が存在するとき、次が成立する:

$$d_L(L-N,\Omega) = (-1)^n d_B(f,\Omega \cap \mathbb{R}^n,0).$$

ただし, $d_L(L-N,\Omega)$ は coincidence degree, $d_B(f,\Omega\cap\mathbb{R}^n,0)$ は Brouwer 写像度.

文献[2]におけるこの定理の証明は非常に簡略化されていたので、本研究では細部を補充して整理した. また、 証明の中で用いられている遅れを持つ方程式に関する結果に、部分的ではあるが、作用素半群の立場からの別証明 を与えた. 後者についてより詳しくは以下のようになる.

 $C=C([-1,0],\mathbb{R}^n)$ とし、ノルムは $\|\phi\|=\sup_{\theta\in[-1,0]}|\phi(\theta)|$ を考える。 $x\in C([0,\infty),\mathbb{R}^n)$ に対して、 $x_t\in C([0,\infty),\mathbb{R}^n)$ $C,\ t\in [0,\infty)$ を, $x_t(\theta)=x(t+\theta), \theta\in [-1,0]$ と定める. また, $D:C\to\mathbb{R}^n$ を次のような連続線型作用素とする:

$$D\phi = \phi(0) - \int_{-1}^{0} [d\mu(\theta)]\phi(\theta).$$

ただし, μ は $\mathrm{Var}_{[-s,0]}\mu \to 0 \ (s \to 0)$ を満たし, さらに singular part を持たないとする. このとき, 次の方程式

$$Dy_t = 0$$
 $t \ge 0$ $y_0 = \psi \in C_D = \{ \phi \in C \mid D\phi = 0 \}$

の解の存在が問題となり、文献 [2] では不動点定理から局所解の存在を示し、大域解の存在を得ていた. 本研究で は、 $d\mu(\theta)=f(\theta)d\theta$ 、ただし $f(\theta)=(f_{ij}(\theta))_{ij}$ が $f_{ij}\in C^1([-1,0],\mathbb{R})$ をみたす場合について、半群理論の生成定理 で解の存在を示した.

- [1] J. Mawhin, Topological Fixed Point Theory And Nonlinear Differential Equations, Handbook of Topological Fixed Point Theory (2005), 867-904.
- [2] Th. Bartsch and J. Mawhin, The Leray-Schauder degree of S^1 -equivariant operators associated to autonomous neutral equations in spaces of periodic functions, J.Differential Equations 92 (1991), 90-99.